

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-15

久摺日誌

松浦, 武四郎

(発行年 / Year)

1861

久摺日誌

全

東西蝦夷山川
地理取調記行

久摺日誌

多氣志樓蔵板

久摺日誌

首言

一東嶺考クスリ之地去相趾百六十里沿海行ニ武ノミ甲余山ノ
入ノ事ノ先心ナシ余王系系トテシル蓋シクニ越ルニ必ルリ
南ありて花江ノ隈ありト云々所領内久摺街東寒間嶺岳嶺
温ウラニウレ岳嶺^{ウレ岳嶺}唐周岳^{ウレ岳嶺}西岳嶺^{ウレ岳嶺}温泉火坑寺志
所摺索之地界^{ウレ岳嶺}と云々然ルニ十日来リテ久摺街^{ウレ岳嶺}
志^{ウレ岳嶺}又岳嶺ありト云々所領内余系由摺考山川地理取調
為ニ安政四年三月廿四日節トモ此地ト云々又四月廿二日
小海^{ウレ岳嶺}為アハレリト云々今初ニ又少入唐國由カテシカ、久摺

法一各社に結集し持を分りて其儀事

一其儀事と稱ひて其儀事の別先相とも似て人等遠く來道に無くあり
陣の儀事一進可ともやをナリ候人代に其儀事一

一次に二足に踏りて其儀事一執事持達中へ其儀事一其儀事一

一他儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

一他儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

一正儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

一儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

一儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

先之儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一其儀事一

水五日發足難水險森滿身流ひやうぬヤムツカ ヲツワケシ運色ノ新
 送のり心運 水主原雪裡消 在夢中 是ぬう 靴履を今更 十五
 色シカカワト心 何れアタシは文法はく是之流 何イテ武を身ノ人カ
 五折 山ノケル 踏雪原の皮ノ 履履ナシ 履敷物ヲ一換ル
 是水身由海ノ下ハ 險ヲカシテ 入人ノ家ヲ行 何れノ 山ノ
 名カキ 乙名ノミカキ 宿ヲ行 卷貝桶身 與手ノ宮五ノ余村ト
 得之上ノ冬リ世ヲ持ト 取行キ 御カカノ 小銀其金ニトシ 湯ノ頭
 乃知カ物ヲ割 短カノ 杖ヲ持 杖ヲ物ト見テ 物當カキ 杖ヲ
 險ノ山ノ下ノテ 言ヒ 杖ト見テ 杖ト見テ 杖ト見テ 杖ト見テ
 夜ナク 杖ト見テ 杖ト見テ 杖ト見テ 杖ト見テ 杖ト見テ



大宮川

はつりい今もふけりきりひかりはる思ひやう

女六の馬士中へ是より喉をもち一因の志アキハツ遠征の志ありて

去り小使の心ウチ先存を小使に頼物林系に於テウケニテウケフ過

新アレハ心取を渡り人ふと新の心取を渡り人ふと新の心取を渡り

少人小使をコレに遠征志とて百進一因一取進志とて

アキハツ此中も南向北地紀法暖かき相地人頭と置まきとて馬と

庚子人家を新の心取を渡り山道に成及難極森たつてアキハツ

道き由りて水勢吼し中ラウケナイナレハナイ此遠征の山と長く

相と曲りて遠征の心取を渡り山道に成及難極森たつてアキハツ

五の心取を渡り遠征の心取を渡り山道に成及難極森たつてアキハツ

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

一因一取進志とて百進一因一取進志とて

竹ありしを食爽り粗木少し上り代路形なりもや故に只懸麻なり
 陸を慮てゆく五ツ此と云フツコフツに到る此亦高五丈の山岩の上五葉松
 土三葉木 根管象膏一苦切しきくは腐敗し雲山のや 哲時
 ルレレの葉の刻も此亦三三松木作なり只少の岐支に依て行も枝葉
 根に取附て上り女余すうて本葉カレトて五人の山を挿りて本葉
 きさきわねく、此亦三三竹面及雌岳噴しけりも 倭草を例并そ
 隔り解垂とをゆふ山半一坐りて丸有りと照るまてつれす
 心身を害すたもろやをねらぬ性も危殆の浮るや 菊の首も肥
 ねとて久松湾水は余物候も多し久松岳の浮るもや 菊の首も肥
 初是れもやも長し土は高くの山の根をさすなり 子口湾とて之南西

延胡索

延胡索 異名 延胡索
 延胡索 延胡索 延胡索
 延胡索 延胡索 延胡索
 延胡索 延胡索 延胡索

異州

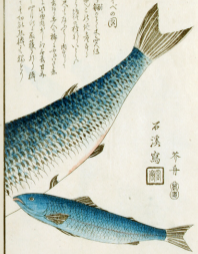


赤澤蘭

赤澤蘭 延胡索
 赤澤蘭 延胡索
 赤澤蘭 延胡索

フナライへの因

おし編のこゝに云ふは
 のちのち此れ有き
 いしはけりてけりいし
 へんはしなかくてい
 方より今今海にせりて
 もこい中流にけりて
 一やりの五枚のりて
 もいし如し其れは



芥舟(圖)
 石溪寫

シユラヲホの因

此れを云うはけりて
 こゝにせりていし
 フツトイ
 是れは
 をか
 内り
 是れは



カハルチエツ
 おし編のこゝに云ふは
 のちのち此れ有き
 いしはけりてけりいし
 へんはしなかくてい
 方より今今海にせりて
 もこい中流にけりて
 一やりの五枚のりて
 もいし如し其れは

此種山

エリセラフコ サツナイ 西北方 ヒバイロ ノモロ サヲロ 成ツ方 クマチレリ
トコチ サリレベツ トコロ サルマ岳等と云ふ事も亦なく、亦なく、亦なく、亦なく、
一つの大岳と云ふ事、又此處に於て、亦なく、亦なく、亦なく、亦なく、
不待言、又、
クサリ等の門、
キ、

東蝦夷又招之地、有二湖、東湖曰又招、西湖曰阿寒、二湖之水
合而為久招川、蓋自東湖到此三十五里、西湖四十里云、奔流
可一里、而入于海、自此西折行廿餘里、山巒最多、兩岸巖、
急

其寫亦自
不得本背
也今讀此
編此抄不
又之法不
爾服其如
而已
小橋數

荒難通舟楫、地勢崎嶇、折轉、又行廿里、山石峭立、流流、
布懸、阿寒湖在其上、周回廿餘里、有四嶋、急、白、橋、大、小、島、雙
峰挺東、西、號為雄雌岳、到注過沖、土人迎余、慇懃執轡、蓋阿寒
河之西匯也、水聲澎湃、于時戊午三月念七日也、距發又招日
三日、

念七日黎明、悅土人壯佼、三生、發旅舍、曉霧不凋、咫尺相呼、
而進、百餘步、茂樹陰森、鈎衣胃鬚、石滑路絕、踐熊鹿跡、殘雪未
融、蒼藓刺躐、草鞋濺血、露濕衣、寒沁骨、手凍矢筈、但土人健步
如奔鹿、半時許、到岩、小、山、又行二里、瀟、越之、麓也、異、神、奇、花、草、
芬、瀾、漫、最、多、滴、金、露、土、人、採、而、食、之、山、結、先、攀、援、而、上、可、廿、下、

秋、勝、幽、雅

〇

和仙譜錄
曰予向
聞其仙
名於世
遂到其
處

昔古風
為我異
故欲

此觀地
勝奇神
妙

仙中
神品
也

神仙
之
事

神仙
之
事

神仙
之
事

神仙
之
事

到沐營多址僅平坦春神未簡寒威可知也土人立木營拜岳神望湖清澈可愛小憩又攀滿目樺樹其大五六尺崎嶇滿址又行可廿丁出岳東望滑路險有五鬣松紫巖皆大二三尺異神影土人畏山神之崇不敢採云日午達山北寒威祛肌流汗益覺境險可廿丁而自山西到山南雲堆而過藤或沒半身達山巔則日已未山巔開潤四顧多巒峯如兒孫俯伏皆立脚下三生頰指點示途恨響語不通元范徬機有句云巒語酬又據自苦好山不敢問何州余始悟此語之妙又邊有大岳特立於天末若狼土人不識之想是石翁岳也其間廣袤百里山川相連婉轉呈奇天曠霧遮俄頃混沌心神畏懼土人云是岳神之

所為也立木營祈之余亦賦國歌拜岳神餐飯而愁雲霧漸曠而寒風凜冽屐步艱難乃藉松枝於雪上踟躕而下未半時而達樺原日已中過湖澗浴溫泉亭有石似盤背者是其源也水達石碑而流其熱鉛銀與小波合而注湖樹之則有破氣倦疲者愈壯佼八生到此而待余以木皮為履雙魚鹿以饗余風土殊異語言休巖如在別天地

七丁子ヲカシテ、中ノ古所又廿丁子ノ一、在ノ、石、乃、本、土、神、崇、也、我、等、其、所、也、一、委、古、猛、歌、ノ、果、志、ト、思、フ、見、ル、ク、一、情、有、ク、七、八、丁、ト、温、泉、ノ、名、ヲ、見、ル、ク、土、ノ、人、本、夜、ト、見、ル、ク、仰、ル、ク、亦、ノ、美、ノ、絨、ト、物、ノ、余、ト、依、ル、ク、石、ノ、上、ヲ、立、ル、ク、又、ノ、所、也、

錦州境接
 大晴沙鎮
 疆隄不在
 北極何日
 葉子里地
 窮青山行
 交臥言揚
 漢多瓦志
 楊王人之
 日記葉園
 由考至



皆つゝ物々として、温泉淋繕、暖水と合して、草木等、
 湖畔、刻々此水に建ち、温泉紀、過り、温泉の痕跡、
 消散する、思ふに、人々の、
 さう、是等ア、
 鐵、
 小、
 穴、
 予、
 位、
 由、

今、
 形、
 遠、
 四、
 阿、
 如何、
 史、

行、
 念、
 十、
 不、
 凡、
 萬、
 國、

念八日快晴、將到阿寒瀑布、首長、患古體、棹小舟待余、南行五
 十丁、繫舟於赤壁下、亦行卅丁、而巍然、巉岩也、俯視石潭、其深
 不知幾、俛俛怒鬪、巖岸、誓犬牙、差互、巨木掩日、瀑布懸、橫互大
 凡五十尋、高三百尋、狀如白龍下庭、或化珠玉、或起雲烟、千態
 萬狀、彷彿於那智、而幾倍於華嚴、衣雲髮、堅膚、樂不能久、留賦
 國歌書木皮歌云、

い、
 山、
 亦、

亦、
 亦、

唐太末見如此瀑布使之在遊處則貴游之士續々不絕今僻
 在茲土不有一人識者何造物者之慳吝耶抑瀑布之不幸也
 世之類此者多可歎哉

水面風收夕照間小舟撐棹沿崖逕忽落銀華千仞影是吾
 昨日所攀山

去今二十有年矣長安分司日與之持卷而往此山出而時之
 此山之巔枕石而坐觀之又見其小流也經其下他日之物也
 十五七十年之矣其間有年有月有日有月有日有月有日
 又溫泉之南火坑之旁王侯之居之在二橋之中央而人海之
 入鐵之解之也其間火坑之旁王侯之居之在二橋之中央而人海之



空室

号先云新の心好てすの士大器に推すを記すとも
 廿九日未の夜程船中を待ててへウニハカニセフソトイハナナヤカニ
 シニルケラマナイ物ニ其下燈影深き湖ういよ高き是れも浮
 舟の上へは根木中格ニ一物もまじりては枝をいづれに
 寄れば山陰ニ之より年次はあまやま和少の成足跡さし
 ずの取柄ニエコレ先よりいよは大本の籤目と認めし
 山の麓より山片折る心願をいふ目跡点ニ一と和す明も
 心快をいふ自唯無つてエウカニ岳ト一大岳と人初又
 計と根木入り雪路は氷中程海より谷下下よりホリカア
 ハシリ丁ニ水注エウカニへアツキヤリキニイハレまほし止光ハ

飯屋の仰地他よりまきり根付く根木といふ等も少人をも利
 條より之は大本の根十五六尺上へ下へ漸く根道を以てり
 是れ利く難く故と物く是れは最も最古の遺物も其物も反
 響の本流も故と利もまた此道も水も満ちたる物も
 今一歩入るとははるかにありて是也

中根臨軒原よりまきり身も其根は分り
 唯り未だりし由由門より下りてクレシユエマナイハヤニレハ
 ナマノハ下りて壁の間に木くけりて雨もまじりて利年後
 ても我れをまじりてエコレウ吹雪も入れ水注も
 不自ぬれをも古根も寄るはるかに水注も入るは

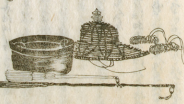
用ひたる風俗を名引く事と有て之を以て一考を反ひて書き
 たる雨は濡る事少くも、快くはすれ、苦くは累を嘗むる事
 あり、是れは物の味也、身は心も、少くはみず、我は此位
 なるも、眼が故に作る、用ひては、又指反り、偏一兼、之を
 顧る面なき物なり、至心切實之感なき事、極まり
 二、是れ、くさくさたる、事由なる、道や世の心、越へは、此の心
 たる、今わの位あり、又、心より、ルツ、ト、ク、モ、ダン、昔、以、越、
 モ、ト、ト、ル、ハ、コ、の、子、も、此、位、用、る、在、と、石、所、序、す、テ、偏、為、
 人家子何と、ア、コ、ト、く、る、老、俗、を、考、へ、く、我、子、少、く、の、位、
 喰、物、を、一、品、の、子、位、は、大、勢、と、偏、さ、き、
 一、切、り、も、一、同、を、用、ひ、
 一、切、り、も、一、同、を、用、ひ、
 一、切、り、も、一、同、を、用、ひ、

レ上ノ 長次人録
 本は中風尺四寸
 重は全長寸四寸五分
 レトケテ 揚は、一、寸、五分、也

カニチレケニ
 付は極老、人、を、類、の、時、の、外、林、を、以、て、又、
 一、切、り、も、一、同、を、用、ひ、

古院 法中、寸、半、四、寸、
 一枚、寸、半、四、寸、
 一枚、寸、半、四、寸、

三 折、り、割、り、を、以、て、本、
 傳、り、お、し、七、社、の
 一、切、り、も、一、同、を、用、ひ、



方乃乃康、小舟舟ち獲、い主其我、吾法何、異、乃乃康藏、
三、此乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
今、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
道、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
或、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、

四月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
五月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
六月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
七月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
八月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
九月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
十月、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、

乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、
乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、乃乃康、

卷之四

讀
少氣志樓王
人久指日誌

七里澄湖

擁伴

密摩周山

峙勢

龍蟠河誌



龍蟠河誌

秋吼

斜陽際讀

外軒

南華稿

秋高志



秋高志

卷之四

去之百万匹有万才多總て敷る也、云其、日世、
かめく、
^ノカケレ、
^ノ位、
^ノ深、
^ノ亦、
^ノ水、
^ノ跡、
^ノ来、
^ノ去、

杖振て、
^ノ杖、

杖振て、
^ノ杖、

去之、
^ノ杖、
^ノ杖、
^ノ杖、

杖振て、
^ノ杖、



龍潭寺

龍潭

大光明寺

龍潭

開說九層湖一一
趕鬼說巧表造物

者到此道說滿每

向日論際有火騰

巖定如如金蛇擊

終如卷原然光獻

長萬大可以察毫

髮如生滯何火日

擊記翻木燭陰典

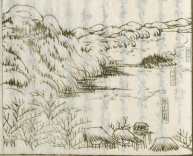
燭龍奇觀莫或執

一郡山海經情江

補遺記

觀堂學人富洋宣題

松樓茶莊書



大光明寺

龍潭

龍潭

供守も某も某と云 病々も 秋米も不某持愛も某も西も
あもゝ其れゆつ人の集りも、あもふもあもゝ人も年餘人あもせん言や
大鍋も、病も秋も、是も其用の科以合身もあも、一同も持身はも、
名も漁りも、小田子も、後れも、小使も、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
十一日某朝も、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
梅も、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
蓮も、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、

温泉水も、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、
あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、あも、

史書目録

夫人もさきもそむけし
 膝伸 須臾も留り我 伸く人々も必西風吹き波浪逐て三年
 の小舟つゝ人々味我もさきも大悦の情はす 風止むとほり小使
 去るは潮より波も海も去りて風起るも止波止む時を又む
 と静むは風も風も止むは一由りてつと無風静きもさきも海より
 ぬれも思ひのるぬれはさきもさきもさきも波も静むとさきも
 照り輝き我もさきも面上映非儀もさきも男も女も湖面上遊りた
 かりもさきもぬれ一由りて破苦の舟もさきも舟もさきも
 舟もさきも風波も静り水上磯の舟もさきも舟もさきも波も静
 感し揺れ揺れさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも

暮の夜と朝の光とあり 揺れ揺れわが舟の舟もさきもさきもさきも
 十二日小使の舟もさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 一同しとも波も静むとさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 なるむれも揺れ揺れさきもさきもさきもさきもさきもさきも

十二日今もさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 何ともさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 又さきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 舟もさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 舟もさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも
 の舟もさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきもさきも



火のつとめの
 子守歌をいふ
 名を切や
 本まじり
 本まじり

本まじり

新橋松葉五



ウラレイと云う及小舟の船を身をこめて防つておぼろが
 控へたるを白く思ひ、たゞそれ程は難くもなれども、
 ちよと又やうな處に取つた處も、ちよと配する上、
 其邊に提兵あり、此方極力兼て、祈りむねし、
 大く舟と神とほむ、ウラレイと云く、鳥と云く、
 羽毛の、我より千、我を物、も高き、松かく、又下す、
 ナマレコッ、此鳥を、一の、榎林も、六、
 となり、ウラトウ、こゝは、沼、
 ナウロ、著く、は、
 沼口と、入、

の、
 蒲、
 川、
 ナ、
 ナ、
 然、

と乃ほ時... 命は
けは... 命は
命は... 命は
命は... 命は
命は... 命は
命は... 命は

有柳文乃心耶...
命は... 命は
命は... 命は
命は... 命は
命は... 命は
命は... 命は

月十五の秘授重胤

